

## 研究ノート

# 高等教育における英語授業方略の提案

—リーディング力養成—

今井倫子

### 要旨

著者が行った授業方略を取り上げ、指導のねらいとそれに合わせた学習活動を紹介する。考えて理解し、関連つけて推測し、振り返って納得するといった学習は、取り組みそのものに意味があり、その過程で学習者の英語力および学習力の向上に多大な影響を及ぼすと考えられる。そして効果的な学習活動を繰り返し継続することは、更には人としての成長を助け促進すると期待できる。

本研究ノートでは、学習活動の目的とそれを達成するための実践方法を示し、それぞれの活動の中で学生にどのような変容が見られたか、また振り返りの記述内容から学生のどのような伸長につながったかなどを分析する。そこで認められた成果を整理し、対象学年、扱った教材、また学生の英語力や興味関心、学習姿勢や意欲との関連性にも目を向け、実践報告をする。まずはリーディングの授業に特化して、前後半期一年間に行った授業方略から、時期別に3つの学習活動を提案したい。

キーワード：学習活動，英語授業，リーディング，考える学習

## 1 はじめに

### 1. 1 背景

英語教科は大学の必修科目であり、本学<sup>1</sup>でも学部別に取得すべき科目と単位が設定されている。現在の履修規定によると、1年次で“Communicative English I”と“Reading I”を春学期に、“Communicative English II”と“Reading II”を秋学期に、そして2年次で Practical English”と“Reading III”を春学期に、“TOEIC I”と“Reading IV”を秋学期に、それぞれ2科目ずつを必修と定めている。

ここでは、2015年度に著者が担当した科目の中から Reading I と Reading II の授業を取り上げ、方略のいくつかを整理し紹介する。どのような学習活動を行ったか、それらにはどのような意味があるか、目的は達成できたか、そして著者の観察、また学生自身の省察から、学生ひとりひとりにどのような変容や伸長が認められたかなどを考察する。

著者が担当した Reading I と II は、1クラスは法学部1年生の33名、2クラスは現代中国学部3年生の計56名、合わせて3クラス総計89名である。現代中国学部は外国語教科に日本語が必修科目として課されるため、他学部と言語科目のカリキュラムが異なり、英語の Reading は I と II のみを3年次に履修する。ただし当該年度に関しては、シラバスおよび使用テキスト、教材はすべて同一のものとした。

### 1. 2 リーディング授業のねらい

Reading I と II は通年で履修し、英文読解を中心とした総合的な英語力の向上と表現力の養成を図ることを目的とする。テキストの単元に沿って、社会、文化、政治経済、情報、教育、科学、医療、環境など世界各国の様々なジャンルのトピックに触れ、内容を理解し、知識を広げ情報を得て、かつそれに対して自分の感想や意見を持ち、発信できるようにする。またテキスト以外の教材もふんだんに準備し、語彙や語法、英文法、本文全体の意味や主題等の確認をし、学習内容を定着させ、英語や日本語で要約したり、日本語に訳したり、英語の構造を読み解いたりといった様々な学習活動を通して読解力を強化する。英文を読む楽しさを味わいつつ、表現力を養う活動を取り入れながら言語運用能力を高めるとともに、物事を考え、未来を生きる力を育む。

こういった目標を達成するための授業形態は、英文訳読をただ受講するだけでなく、学生たちの学習活動参加を主体とした演習形式とした。

### 1. 3 本研究の目的

著者の掲げた1. 2の授業のねらいを達成するために、リーディング科目における望まし

い授業展開，目的に見合った効果が期待できる学習活動とそれらを組み込む方法，導入の時期や順序などを工夫して実践し，それぞれの評価までを考察する。対象学生やクラスの英語力は当然のことであるが，学年や学部学科，興味関心のある分野，そして置かれた状況と目的は，個々の学生によって大いに異なる。そういった非共通性は総合大学多学部学科の必修科目英語であるから尚更であろうし，一般にクラスの学生すべての願い通りに授業を進めていくことは至難の業である。

だからこそ，授業方略を考案し，趣向を凝らして実践しつつ，修正し改善し，よりよい学習活動を追究していくべきではないだろうか。学生と同様に教師も振り返りを経て，そして教師が学生につける「成績」としての評価のみならず，学習活動に対して学生と教師双方からの評価を合わせみて，検証を進めていく。

著者は教科学習の中で，学生たちが未来を生きる力を育む手助けをしたいと考えている。リーディング授業は英文読解を中心とした総合的な英語力の向上と表現力の養成を図ることが目的であり，読解が基本なので扱える題材が豊富なため，最も運営しやすい科目だと言えよう。やり方としては学習活動の中に教え導きたいことをうまく具合に組み込んでいけばいいのである。学生は，まず様々な情報や知識を得る。自分では見向きもしなかった事例かもしれないし，今後も絶対に触れることのなさそうな話題かもしれない。正しく読み取れるように，意味や英文構造を理解しようと努力する。学習活動を通して，知らない単語を推測したりパラグラフごとや全体の内容を大まかに捉えたりなど，英語読解のコツがわかるようになる。忘れていた，あるいは苦手だと敬遠していた文法語法がわかって正しく解釈する力がついていく。自信を持てるようになり，英語に触れることが少しずつ楽しくなる。もっと知りたい，もっと読めるようになりたいと思う。一生懸命学ぶ。内容がつかめたら，次に，その事柄についてよく考えて，もう一度考え直して，自分の意見や感想，疑問を持つようになる。時に他者の意見を聞いたり授業で真実や正解を教えてもらったりすることで，物事を客観的な視点で見える目も養われ，適切に判断できるようになる。そして自分の意見や感想を，発表したり記述したりして表現力をつける。人前で話すことに慣れてきて，ことばの用い方まとめ方が上手くなる。

リーディング授業のいくつかの学習活動では，英語力養成のタスクに思考する場面を多く設け，学生たちはそこで自分をみつめる機会を持つことができる。取り組みの数々には，自分を成長させる何らかの意味があり，一生懸命頑張った分だけ，たとえ小さくても自身の変容や伸長の助けとなり，今後の人生を生き抜くのに役立つ確かな歩みを感じてくれたらと願う。

## 2 授業方略

著者が Reading I と II で一年間に行った授業方略の中から学習活動を 3 点取り上げ、その目的と方法を紹介する。成果については、実践を通して一般的な高等教育の場で想定できる学習効果を示すのみとし、ここでは学生ひとりひとりの伸長の具合と度合を整理してデータ化するという分析と結論づけは行わない。

### 2. 1 グループワークでの英文読解演習

新しく読む長文をいくつかに区切って、クラス全員を割り振り、それぞれが担当部分を読解する。グループで意見交換をして考えをまとめ、代表者が日本語訳や内容をクラス全体の前で発表して、最後に確認を行う。

#### 2. 1. 1 目的

英語力読解力、そして表現力を養成する。英文から新たな知識や情報を得られる楽しみを味わいつつ、自分の力で英語が読めるという自信と達成感を育む。個々の、またグループの取り組みが意欲向上につながり、更に自分の考えを人に伝える力、ことばで表す力、人前で話す力が身につくよう活動に参加する。

#### 2. 1. 2 方法

テキストからこの学習活動に適切なユニット、最初は易しめのものを選ぶ。あらかじめクラスの人数に合わせて本文をいくつかに区切り、担当箇所を全員に割り振っておく。初回導入時には、必要に応じてまず内容に関する予備情報を仕込み、特に難しく複雑なものはその背景やテーマなどを紹介する。日本語にしにくい新出単語、キーワード、また読解に必要な知識は時には別途資料を用意して、知らせてもよい。その際に、学生が既に持っている情報を引き出せるような、また興味や関心を膨らませるような発問や問題提起をしたい。

次に、内容を大きくつかむよう本文全体をざっと読む。採用したテキストには英文の横に単語や内容の注釈が入っていたので、それらを参考にする程度とし、できる限り途中で単語を調べたり文法や英文構造を尋ねたりして立ち止まらないようにする。わからなくても気になることがあっても、とにかく読み進めていくようにと指示した。

英文によってはある程度の説明を要す。あまりに難解で馴染みのない取っ付きにくいものは、読み始める前に諦めてしまっって手掛ける気にすらなれないかもしれない。ここでやっとなグループ割りを知らせる。最初からわかっていると、他人任せになってしまったり担当箇所のみ細かく読もうとしたりする傾向があり、それを回避するためである。

まず、必ず全体を読み直して内容を捉え、その上で自分のパートに丁寧に取り組む。わからない単語やイディオムを片っ端から調べて単純に日本語に訳すのではなく、文法や英文構造などにも注目し、また補足説明などしたい場合には各自で資料等を用意し、責任を持って納得のいく説明ができるようにする。リーディングの授業ではノートを一冊準備させ、ユニットの学習開始時には本文を載せた用紙を配付し、それを適宜切り取って自由に使用できるようにした。予習の段階で、パラグラフごとにキーワードや概要、また調べた単語や日本語訳など、ただし全文を日本語にする必要はまったくないと念を押し、学習の形跡を書き留めておくよう指導する。

易しい英文は1回の授業で完結するが、そうでない場合のユニット2限目の授業では、最初の10分程度でグループごとに話し合いや意見交換の場を設け、発表者を選出させる。教師はグループを巡回しまとめ具合をみて、助言したり質問に答えたり時には間違いに気づかせたりしつつ、学生ひとりひとりがどのように参加し役割を果たしているか、また各自のノートをチェックして皆が予習にどのように取り組んでいるかなどの確認と評価も行う。

次に代表者による発表であるが、指定された持ち時間の中で、ひとりあるいは数人が前に出てパラグラフの概要や部分的な日本語訳等を自分のことばで説明する。発表後にはその場で、英語や内容の間違いは直し周知させるべき不足箇所は補う。その際、教師は一方的に正しい訳や文法事項を教え伝えてしまうのではなく、学生自身の力で気づき考えて正解を導き出せるように発問し類題を与え、納得しながら学んでいけるように誘導する。

ノートはグループワークの間に、また発表時に、あるいは教師による説明や指導中に間違いを直したり要点を書き加えたりして、使い勝手の良いわかりやすい自分専用の「手引き」を完成させる。試験中に一括して回収し検閲した。

### 2. 1. 3 成果

訳読式の、また受け身の授業ではないため、学生たちは進んで学ぶ機会を得られた。全文を日本語に訳すとすると、特に英語学習が苦手だったり嫌いだったりする学生にとっては拒絶感が拭えないが、大まかな内容理解でも部分的に割り振られたことでやる気が湧いて取り組んだ後にも達成感を味わうことができ、教えてもらっただけの知識の詰め込みや写しただけの情報の記録と異なり、英語力の定着にもつながる。

振り返りの叙述<sup>2</sup>によると、「日本語でも英語でも、自分自身がしっかり理解していなければ相手にわかりやすく伝えられないし文章で要約することもできない。改めて考えをまとめて表現することがいかに大切かを感じた」「自分が曖昧な部分も人前で発表するために理解を深めるので、しっかりした力と知識になると思った」「人前で発表するのは苦手だったけど、何回か挑戦できたのでとてもよかった」「人前で話す恐怖心がなくなった」「頭の中ではわかっ

ているつもりでも、皆の前で発表することはとても難しかった。先生からのつつこみ？（質問や確認）<sup>3</sup>が入ると、実際は出来ていなかったり間違っていたりすることに気づかされて、「いい経験になった」など、人前で発表する機会を持てたことが有効な活動であったと多くの学生が述べている。また、グループワークでのメリットとしては、「他の人の意見を尊重し自分の意見を整理して正確に伝えることが大切であり、これらのことに気をつけて活動できたので今後に生かしていきたい」「グループワークでは、周りからの指摘で自分の見落としや間違いに気づかされ、話し合い後の先生からのサポートで、わからなかったところが明らかになり、とても意味の持てる活動だった」「表現することで自分の理解が深まると実感した」「グループやペアと読解したり意見交換をしたり、みんなの前で発表する機会が多くあり、そうすると考えが煮詰まってきた。大変に感じることはあったが、表現することで自分の理解度がより明らかになり、先生や仲間から補足をしてもらうことで考えも深まった」など、人の意見や自分と異なった考えを聞くことで自身の意見や考えがより明らかになった、深く見直すことができたとかなり多くの学生が意義を認めている。そして、「グループ活動をするのがなかったので自分の意見を伝えるよい練習になった」「ペアやグループでまとめて発表する活動は、意見をまとめる力も表現力もついてとてもよかった。先生が言っていたように、発表するのは一方的でも、他人にうまく伝わる文を考えるのは非常に力になった」「他の人の意見を聞いて自分のものと比べると、思いつかなかった表現などを知ることができ、活用できた」「自分の意見をしっかり持つこと、そしてそれを相手にも伝えようとする力がついた」など、クラス全体の前で発表する以前に、少人数相手でも自身の意見や考えを伝えることの難しさや大切さに気づいた学生も非常に多かった。特に現代中国学部3年生の学生は、就職活動や社会生活においても必要な力が、教科学習という思わぬところ、リーディングの授業内でつけられたと記述しており、この活動が表現力養成の手段として価値が認められたと考察される。

ノートの提出は一年間に2回行った。ただ英文訳を書き連ねるだけでなく、人のノートを写しただけでなく、工夫がなされた独創性のあるものがよい。他者からの修正が加わったり、異なった解釈に同調したり、気づかなかった知識を取り入れたりして、学んだ内容を自分のために形として残すため、納得して理解をより深めることができる。他者から入手した情報を整理してわかりやすく正しく記すという作業は学びの場での基本でもあるが、認知活動には効果的である。図1は学生のノートテイキングの写しであるが、多くの学生がこのような取り組みが難なくできるようになっており、この学習活動への積極的な姿勢は高く評価される。一方、学生たち全員のノートを検閲することにより、著者は学生の記録の中に新たな気づきや驚きがあったり修正や改善を施すヒントを得たりと、自身の教授内容を振り返ることもできた。



図1 学生のノートテイキングの写し

## 2. 2 空所補充による日本語訳・要約練習

新しく読む英文の日本語訳や日本語要約から、キーワードや重要語句、主題を構成する箇所などを抜いたワークシートを作成する。英文を読みながら文脈と日本語のつながりを考えて空所補充をし、取り組み後に模範訳や例解と照らし合わせて各自で確認作業を行う。

### 2. 2. 1 目的

英語読解力、日本語表現力を養う。英文を日本語にする際に、知らない単語を片っ端から調べたり一文ごとに一字一句直訳したりせず、文脈で内容を捉え、前後関係から意味を推測し、言語をうまく運用し記述する能力をつける。

### 2. 2. 2 方法

テキストからこの学習活動に適切な内容と分量のユニットを選ぶ。どの英語がどのような日本語になるのかを照合できるように、また、感覚的に想像して意味をとってしまうことのないように、極端な意識はせず、英語に忠実でありながらも流れのあるわかりやすい日本語訳あるいは要約を作成する。

英文を読みながら、辞書を使わず、文脈とことばのつながりを考えて日本語訳を完成させる学習活動により、英語の読解力や、日本語の使い方や表現力を養っていくのがねらいである。最初はキーワードや重要語句といった単語と語句だけを当てはめる空所補充にする。徐々に英語そのものや内容の難易度を上げていき、また一語ずつの穴埋めから、句や節、長めの文を入れていくように、ワークシートは段階的に工夫を凝らす。

英文と空所補充のワークシートを配付し、時間を決めて取り組む。得点化する場合は、配付する模範訳に、単語1ヶ所につき1点、句や文は3点5点などと提示するか、括弧や下

線部にそれぞれの配点を記すなどし、また適切な訳が複数想定できる場合はいくつか載せ、採点基準を明らかにしておく。

学生たちの取り組みを見て回り、余裕があれば個々の学生の進捗状況のチェックや適宜助言を行う。作業を終えたところで、ペアワーク、数人のグループワークをさせてもよい。自分では気づけなかったところ、わからなかったところも、他者と共有することで、より明白により深く理解できることがある。また、クラス全体の前では発言を躊躇しても、ペアやグループでなら活動に参加して積極的な自己表現も可能な場合があると考えられるため、自信や意欲を持たせるきっかけにもなる。ただし、この意見交換は日本語の細部にまで注意があるので、大人数では効果は得られないであろう。

最終的に、その授業の間に、模範訳や例解を口頭で伝えるか印刷物を配付して確認なり採点なりを各自で行う。この日本語で合うか、こんな解釈はどうか、この捉え方は間違っているかなど、詳細な質問や意見が出るはずなので、机間巡回をしながらひとつひとつ丁寧に答え、説明し、かつそれらすべてをクラス全体で共有する必要がある。

### 2. 2. 3 成果

辞書の使用を制限され、前後関係から単語の意味や内容を推測し、英語力を駆使し、ことばの使われ方とつながりを考えて自分の力で日本語訳を完成させなければならないので、初回の実践では相当戸惑った学生もいたようである。そういった理由で、この活動に適切な英文の選出と括弧づけにする部分の抜き出しは、吟味して準備をしたい。

2回目3回目ともなると、空所補充のコツがつかめ穴埋めの仕方がうまくなり、この学習活動の意義がわかって達成感満足感を得られるようになっていく。年度末の振り返りでは、多くの学生が「初めての英文で、知らない単語や表現が多くても、それを推測して単語や文を埋めていく活動が楽しかったし要約の力がついた」「英文を読む機会があまりなかったので、最初はまとめるのに苦労したしうまく内容を捉えられなかったが、ポイントをつかんで読めるようになった」「英文の読解は一文一文訳すのではなく段落ごとの要約に力を入れたので、だんだんうまくまとめられるようになった」「要約練習が単語だけのものから句や文を入れるものになったことでとても難易度が上がったが、順々に前後関係や内容から単語の意味を推測する力がついていったと思う」と述べており、効果が認められる。

最近の、特に英語学習を不得手とし英語力の低さを自覚する生徒や学生たちは、知っている単語の意味を並べるだけで、文構造や文法は気に留めず、感覚で全体の意味を捉え、勘で日本語に訳してしまう傾向がある。しかしこの学習活動によって、英語を日本語にするときの仕組みがわかって自分のことばで表現し、その都度見直して訂正や加筆を施し確認するといったサイクルが、英文を読んで日本語に訳せるという体験として蓄積されていく。やはり



辞書を片手に英語から日本語に一語一句直訳していくような読み方では、「こういうふうにして英語を読んでいけるようになってしまった」「英語が少しずつ読んで理解できるようになった」という実感は湧かず、自分で考え関連づけて内容を捉えるという読解力を培うことも難しいのではないだろうか。「穴埋めの要約練習をした時に、自分が今までいかに知っている単語だけをつなげて英語一文一文を日本語に訳そうとしていたかを実感した」と述べた学生は、英文の読み方を改善し、複雑な文の構造や語法を確認して英語そのものから内容を理解し概要を捉えることができるようになったそうである。

空所補充の練習では、最後に各自が埋めた日本語の確認作業を行う。その間にも学生たち全員のワークシートを見ながら質問に答えたり説明をしたりするが、同時にその問いや疑問をクラス全体への発信に替え、一対一の場での解決に留めずクラス全体の共有と周知になるよう努める。個々の、あるいはペアやグループの取り組みが形を変えてクラス全体で取り上げられることにより、個人でも数人の仲間でも気づかなかった新たな発見や納得が得られ、また日本語訳と内容理解だけでなく教科学習としての英語読解の確認も行うため、更に理解を深め知識を広げ、学習活動の成果に期待できる。

この活動はリーディング授業が始まって2ヶ月ほど経った頃に単語を中心に入れるものから取り掛かった。図2に、ほぼ最終回に近い授業で行った、語句や長めの文を補充する日本語訳練習のワークシートの例解と、それを見て確認した答案の写しを示す。



図2 単語や句・文を入れる空所補充のワークシート

## 2. 3 英文記事の要約とレスポンスのレポート課題

英語のウェブサイトや新聞から興味関心のある英文記事を選んで読む。その内容を3～5行程度の日本語で簡潔に要約し、それに対する感想や意見を同程度の日本語でまとめる。提出の期限や回数を指示し、授業外での学習課題とする。

### 2. 3. 1 目的

英語のウェブサイトへのアクセスに慣れ、様々なジャンルのトピックや形式に触れる。英文から知識や情報を得ることで、語彙を増やし、英語表現やイディオムの幅を広げる。読んだ内容を正しく理解し、日本語または英語でまとめる力をつけ、扱った記事について自分の感想や意見を持ち、それを日本語または英語で表現できるようにする。

### 2. 3. 2 方法

授業外の自律学習課題とする。この活動の開始時には進め方を説明するが、サンプル記事を数点準備してその中からひとつ選び、授業内で一度取り組んで趣旨や方法を把握させるとよい。この活動のための要項は資料1に載せる。

英語のウェブサイトあるいは新聞から興味関心のある記事を選ぶ。インターネットのリソースとしては、学生が適切な記事を選びやすいよう Kjeldgaard (2015) の“List of Online Resources for Students”<sup>4</sup>を引用して紹介した。分量は200 words 以上400 words くらいまでを目安に、長い英文は適宜抜き出してもよい。ただし、どの部分を残すかを誤ると、ポイントを押さえて要約することが難しくなり、主題にズレが生じ意見や感想も曖昧になりうるので慎重に行うよう指導する。

次に選んだ英文を印刷する。提出はA4サイズ用の紙で片面のみとし、印刷してそのまま使用するか切り取って用紙に貼り付ける。そこには必ず記事の出処、見出しや題名、日付、記載されていれば著者名、または抜き出した巻、ページなどを明記しておく。

英文を読む作業に入るが、例えば重要箇所にラインを引いたり、ディスコースマーカーをチェックしたり、調べた単語の意味や関連事項、文構造の解釈を書き加えたりなど、読解の取り組みがわかるようにその形跡の記事に直接手書きで残すようにする。すべての単語の意味を調べたり完全に日本語訳をしたりする必要はなく、キーワードやキーセンテンス、またテーマを絞り、記事の大意や主題をつかむための取り組みが学生自身のやり方でなされていればよい。

そして記事の内容を日本語または英語で3～5行、あるいは3文程度で簡潔に要約し、更に、扱った記事についての自分の感想や意見などを同程度でまとめ、書き込みをした用紙に記述する。ただし、英文記事を読んで理解し意見や感想を持つことに重点を置くため、英

文法の詳細な理解や厳密な日本語訳にはこだわらない。

提出方法を示す。英文記事を載せた A4 用紙の上部右端に、提出日と受講授業の曜日と時間、学籍番号、氏名を記載する。英文記事に「読解の取り組み」の形跡があるか、用紙の下段に規定に合った「要約」と「感想・意見等」が書き込まれているか、誤字脱字がないかなどと記述内容の確認をする。複数ページになる場合は左上部分を糊付けまたはホチキス留めする。提出は一週間に 1 点のみ、最終期限までに 3 点以上とするが、一度にいくつも作成するのではなく、記事選びから考察と記述まで、ひとつひとつ丁寧に吟味して仕上げるよう導く。

家庭でのレポート課題とし、授業内活動に専念させるため、途中で書き換えたり加えたりすることのないように回収は授業開始時とした。次の授業までの一週間ですべてのレポートを検閲し、感想や助言などのコメントを入れて返却する。その際に、学生のレポートの中から、努力の跡が見られるものや趣向を凝らしてあるもの、ぜひとも紹介したいトピックや旬の話題を取り上げたものなどを 5 ～ 7 名分ずつ縮小印刷して全員に配付し、共有する機会を設けた。

### 2. 3. 3 成果

非常に多くの学生が、ひとつのレポートを仕上げることは大変ではあったが取り組んでよかった、おもしろかったという感想を述べている。

この学習活動の開始時には要項を配付し、記述例を提示して説明した。サンプル記事を 2 ～ 3 準備して、その中からひとつ選んで要約し、更に内容についての意見を記述するという練習も行った。そして同じ記事を選んだ学生同士、ペアあるいは数人のグループ内で発表し、読解の間違いを指摘したり意見や感想の相違を共有したりする時間をとった。

Kjeldgaard (2015) は、大学の英語教科リーディングの授業の中で読解力をつける学習指導に Extensive Reading、多読を組み合わせることによる効果について言及している。一部の学生の、かつアンケート調査に基づいた統計<sup>6</sup>ではあるが好意的な意見が得られており、学生の興味関心を引き出し自律学習を促進するための、読解力養成に適した学習活動のひとつと言えよう。

著者はこの学習活動を日本語で要旨をまとめることに限定した。活動開始時は英語での要約を認め、むしろ奨励していたが、文末の英文一文をそのまま写し取って終わりという学生が出てきたためである。キーセンテンスを選んでいれば把握していると判断できるが、全体の要約となると日本語で記述するほうがより深い理解と思考を要する。英文を読んで内容をつかみ、考えて日本語でわかりやすく簡潔にまとめるという活動は、英文を正しく読めているかという見極めにもなる。しかし、文章を要約することは日本語でも難しい作業で深い理

解を伴うため、キーセンテンスを選ぶ、あるいは全体の要約でなく主題、テーマのみを一文で記すだけの活動を第一段階にしてもよかった。

英語のサイトや英字新聞から記事を選ぶこと、そして英語で情報や知識を得ることから、いくつかの利点が見出された。「自分ではぜったい英語の記事なんか進んで読まなかったと思うので、この課題はいい機会になった」「世界ではどんなことが話題になるのかどんなことが起こっているのか、海外のニュースに関心を持つようになった」などと英語を読むきっかけ作りに役立ったという感想や、「日本語の新聞と違った視点で書かれていて興味を持てた」「日本語と英語で読み比べたら同じ出来事でも取り上げるポイントが同じでないことに気づけておもしろかった」「外国人の考えを学べた」「英文で読んだとき日本人の見方と少し異なった世界の情勢に対する見解があったのでとてもおもしろく、今まで以上に興味を抱くことができた」などと、書かれた言語から物事の捉え方の違いに気づいたという感想が多数得られている。

また、英語を読むことの抵抗が軽減されたと感じた学生も多く、「英文を読んでみると結構内容が分かるようになって嬉しかった」「この活動でもっと英語ができるようになりたいと思った」などと意欲を示している。更には「この活動をきっかけにアメリカの経済新聞を購読するようになった」「もっと英文のニュースを読みたいと思って New York Times の会員になった」などと進んで英文に触れようとする学生も目立った。

英文を読んで理解する力は、この活動では、内容を正しく捉えて簡潔にまとめられるかではかる。「最初はまとめ方がわからなくてただ文を並べて書いていたが、だんだん内容をつかんで簡潔に要約できるようになった」「最初は3行程度で要約するというのがすごく難しかったけど、だんだん大事な文がわかってきて単語を調べる回数も減って、内容をまとめられるようになった」「最初は英文を読んでもどの文が大事なかわからなかったが、回を重ねるごとに全体で何を言おうとしているのか読み取る力がついた」「読みながら要約を意識する癖がついて、内容をつかむのが速くなった」などとほぼすべての学生が英文を読んで大意をつかむことや大事なポイントを押さえることに慣れてきた、あるいはたやすくできるようになったと効果の認められる叙述をしている。そして、「要約はすべてを日本語訳するよりはるかに難しいとわかった」「重要な箇所の見つけ方やまとめ方が回数を重ねるにつれてうまくなった」「先生に指導されて、特に伝えたいのは何かを注意して読むようにしたら、だんだん上手にまとめる力がついた」などと、英文を日本語に訳すだけでなく内容をつかむことの意味がわかるようになった。

読んだトピックに対して、感想なり意見なりを持ち、更にそれを自身のことばで書き記すまでには理解、納得という過程が必要となる。「入手した情報や知識に対して自分なりの意見を持つ力がついたし、それを書くことで表現力もついた」「自分の思ったことを言葉にし

てみんなに伝えることの難しさがわかった」というように、多くの学生が自身の考えを表現することの重要性にも気づいている。これは特に3年生の叙述に多く、就職活動等で自分の意見を的確に記述する機会と重なり、功を奏したと言えよう。

また、「毎回意見や感想を書かなければならなくてすごく苦手で億劫だったけどがんばってやってよかった」「3回目になって、文章の意味が分かる嬉しくて達成感も味わうことができた」、あるいは「何回も取り組んだので英文を読んでまとめることが苦にならなくなった」「先生に（レポートは一度にまとめて作成しないようにと）言われた通り、提出したものが（直されたりコメントが書かれたりして）返却されてから改善点を組み込むことができよかった」といったように、英語の教科学習に対して積極的な建設的な姿勢で臨めるようになった学生や、「問題意識が持てるようになって、それはこれから社会に出るためにも非常に大切だと改めて実感した」「自分が理解し納得できるまで掘り下げたりどうしてそうなるかを考えたり、本当に多くの力をつけられた」などと、英語力要約力のみならず、自分自身の取り組みを生きる力に有効に活用できている学生もいた。

学生が提出し著者が一週間預かってコメントなどを書き込んだレポートから、個人的な意見や感想が述べられているため氏名は伏せ、提出期間中には毎回5～7名の作品を紹介した。特に読み合わせる時間は取らなかったが、他の学生の活動を共有することには大きな効果があったようである。自分のレポートが載っているのを見つけて喜んだ学生もいたが、一生懸命取り組んでよかったという達成感や、がんばればちゃんとできるという自信につながったのではないだろうか。自分が知らなかったニュースに興味を示したり、他者の上手なまとめ方や自分では思いもよらない切り口に感心したりと、熱心に読みふけている学生も見受けられた。関心がなく自分では読もうともしなかった分野でも、皆のレポートを通して情報や知識を広げることになり、意識改革とまではいかなくとも自分自身への刺激にも役立ったようである。また、偶然同じ記事を取り扱ったのに要点の捉え方も感想や意見の持ち方も同一ではないことに気づき、物事を考え感じ判断する観点の違いに興味を示した学生もいた。「他の学生のレポートを印刷されたものを毎回読んですごいと思ったり自分の視野の狭さを痛感したりした」「他の人の作品例をいつも配布してくれたのでそれを読むことでも勉強になった」などと述べており、このような形でのフィードバックも効果的であったと認められる。

振り返りではこの課題に関して叙述した学生が最も多く、自分の取り組みが回を重ねるごとに目に見えて要約力がついていった、知らない単語の意味を辞書で調べずに大きく内容を捉える力がついたなど、苦しかったがそれでも楽しみつつスキルアップを成し遂げたと自身で感じ取れたため、最もやりごたえのある学習活動だったと評価したのだろう。

図3は、学生が提出したレポートに著者がコメントを入れて返却したものの写しである。

なお学生たちの取り組みは、提出された A4 用紙のものを 50% に縮小し A3 用紙に表裏とも印刷して配付した。



図 3 コメントを入れて返却した学生のレポートの写し

### 3 学習活動の評価

教育現場における学習活動は、学生側と教員側で評価される。それぞれの活動にはどのように取り組めたか、その活動によってどのような力づけられたか、何に気づきどこを改めよう伸ばせたか、またその力を持続できるか、どのような場面でどのように生かせるか応用できるかなどを、双方の立場からはかりみる。両側の評価が合致して均衡が保たれたときに、その学習活動の価値、成果が認められると言えるだろう。

#### 3.1 評価するということ

紹介した 3 つの学習活動の評価については、2 章それぞれの節の 3 項で、学生の振り返りを引用し学生の視点で見た成果として考察しているのでここでは言及しない。また、例えば学生による授業評価アンケート<sup>6</sup>のように授業全体に対しての質問項目からは特定できないため、著者の授業を全体的に捉えた評価はこれらの方略の成果として取り上げないこととする。

学習活動の評価は画一的でなく、その善し悪しを容易に結論づけることはできない。それぞれの活動の成果は前述したように対象学生によって相違があり、活動の難易度や向き不向き、好き嫌いなど様々な要因が影響するため、クラス全体で実施しても個人レベルでの適用

はひとりひとりの取り組みや満足度理解度と、客観性のある完成度達成度を分析し、活動そのものの意義や効果を考察して判断する必要がある。

従って学習活動の評価は、例えば、学生のレポートなどの記録を時系列で取り上げ、学習活動のねらいと個々の取り組みを経て見られた変容との関係性を分析したり、試験や復習テストなどの解答を問題別に整理し、それまでの学習活動への取り組み状況や各自の振り返りの出来具合とのつながりを見出したりと、個別の検証をしていくべきであろう。「成績」をつけるということは、教師が提供した学習活動に学生が取り組んで得られた成果に対して教師が評価をすることである。そして教師が自身の授業方略をどう評価するかは、提供した学習活動がどのように学生の伸長や成長を助けたかによるものである。

### 3. 2 教師から学生への評価に対する評価

教師は、自分の作成したシラバスに則って授業を運営していくのだが、学習活動を通して知識や情報の伝達に終わることなく、学生たちが自ら学ぶ意欲を持って更に成長し飛躍できるよう導き、人生を先に生きる先輩としても、生きる力を育み、教え、伝授していく役割を担うべきだと考える。

教育活動の一環で、教師側が個々の学生に行う評価と言えば「成績」が思い浮かぶ。それは学生の学習に対しての結果報告となるわけだが、ここではそういった成績評価ではなく、教師が行った授業やその中で提供された学習活動に、学生がどのように取り組みどのような効果が得られたかをはかりみることを言う。それらの活動内容は授業の目的を果たしているか、実践するまでの指導と導入の時期、学習の順序は適切に設定されたか、実施方法や指示は正確に伝えられたか、またすべての学習活動の意味が理解され、かつ、ねらい通りのフィードバックが学生ひとりひとりに施されたかに至るまでを考察し、そこで認められた価値を査定する。つまり、教師が自身の授業方略を評価するということである。

評価というと、教育の場では成績をつけるための判断資料として試験を行い、点数化して段階的に割り振ることが、一般的で客観的に納得できる最も公正な手段となるであろう。著者も、1学期の間に中間期末の2回か中間あるいは期末だけの1回は筆記試験を行っているが、出題については十分に吟味し、常に自身の手作り問題にしている<sup>7</sup>。内容は、絶対に丸暗記だけで高得点が取れてしまう問題にはしない。試験問題には、教師の指導方針、理念みたいなものがあらわれるだろうが、著者は毎日の授業で、わからない単語も推察して導き出そう、物事をじっくり考えよう、自分の知識や情報を何かと結び関連づけて定着させようなどと説いており、そういった力をつけるための学習活動を与えているのに、試験問題がその取り組みの成果なしで解けてしまうものであってはいけなはずである。試験とは、授業で教え導いてきたことや懸命に取り組んできたことを、言い換えれば授業方略や学習活動を、

正しくはかりみて評価判断するための手段であるとも言えよう。

そこでまず、著者のこだわる試験について述べる。学生たちの振り返りからは、試験問題の形式について好意的な意見が得られた。「丸暗記でできる試験と比べてひとつの問題にかける時間が長くなったが、ちゃんと前後の文を読んで考えて答えを導き出せるようになった」「きちんと英語を理解できている上でその場で読んで答える問題だったので、暗記だけでは対応できないが、その分自分の力で解いていると実感でき、本当に自分に力がついたと確認できた」「理解して納得して勉強した文法や内容はちゃんと覚えていて、試験の問題も解けた」などと、学生たちに出題意図までも正しく伝わっていたようである。「考えることで理解が深まり読解力がついたので、それを見るためのテストだった」「True/Falseの問題も設問が変えてあって暗記しては太刀打ちできないテストだったが、ちゃんと勉強して理解しておいたのでやりごたえがあってよかった」「考えることが多くて内容の濃い試験だった」「自分の読解力がついているかどうかの判断ができる問題だった」「先生のテストに暗記だけで臨むのは限界があるとわかっていたので、自分でしっかり考えて理解して確認するという対策を行ったため、テストでも発揮できたし自分の力になったと思う」「丸暗記だけでは解けない問題にするとと言われていたので、ちゃんと考えて理解して納得できるように幅広く勉強した。その結果、高校までのどの学習より圧倒的に英語力が向上した」という叙述も多く、このような試験問題にしたために、学生たちが自分の学習方法を改善し、力のつく勉強の仕方を身につけられて、更にその効果が他教科にも及ぶようになればと期待している。また、試験を受けて自分の英語力や英語の学習法をみつめ直すことができ、「英語力が（以前と比べて）かなり落ちていると実感したテストだった」「丸暗記よりちゃんと考えて理解して納得して覚えたほうが忘れないし自分の力になると言われてきたが、ほんとうにその通りだとわかった」といった叙述もあった。

次に、ノートや提出物には添削やコメントを入れて返却したが、その効果について言及する。「レポートのコメントに従って、次はこうしよう、ここを直そうと自分なりに懸命に取り組むことができた」「要約はここをまとめたらいいか、これは省いてもいいとか教えてくれたので、だんだんできるようになった」「ここを省略するとか一行でまとめるとか具体的にコメントを書いてくれたのでよかった」「指導してもらって、特に伝えたいのは何かを注意して読むようにしたら、だんだんと要約するのが上手くなった」「レポートやテストにコメントをくれたので、（間違いを）直すことができ、自分の表現の特徴みたいなものも分かり、読み手や聞き手の立場になって考えて理解してもらえるように表現できるようになった」「一回目に単語調べをたくさんして出したら先生に『単語を全部調べればいいレポートになるというわけではない』と言われたので、二回目以降は要点を押さえて読むようにしたら、内容もとりやすくなった」といったように、具体的なアドバイスを施したものについて



は、学生たちが素直に指導を受け入れて、自分の勉強法の改善に生かすことができている。また、「返却されたレポートにはいつも先生の直しやコメントが書かれていて、それが自分の次への糧になった」「毎回のレポートに先生のコメントがあって役立ったし嬉しかった」「英語は苦手だったけど、コメントで褒めてくれると嬉しくてやる気につながった」などと学習意欲を高める助けにもなったようである。

そして次に、学生が自己採点をする意味を考察する。復習テストや要約練習のワークシートなど一部の学習活動は、各自で自分の答案をチェックし、確認と訂正を行うように指示している。ただ○×をつけて得点を計算するのではなく、表現や解釈の仕方のどこがなぜ間違ったか、どのように正せばよいかなどを見直すことは、自分なりの納得を経るため、学んだことが定着し理解がより深まることになる。ここで、メタ認知でみることができれば尚更効果的であるが、まずは自身の答案をきちんと丁寧に正確に採点することが大切である。教師は学生が採点した答案を回収し、その採点を検閲、つまり学生が正しく振り返りができているかを「評価」し、学生の理解度をはかる。特に自分の答案であるため、学生の多くが何となく意味が取れているからとか、感覚的に合っているだろうからと都合のいい甘い採点をしがちであるが、そこを気づかせてやらねばならない。いい加減な誤った自己採点は、情報や知識を正確に入手できないということにもつながるであろう。これは有意義な振り返り活動のひとつであり、自分を正しくみつめられるかの判断になる。

以上は著者が学生に施した評価に対しての教師の立場からの考察だが、著者のすべての学習活動が学生全員に好評だったというわけではない。例えば、「テストもノート検閲も不要だと思う」「評価は毎日の活動やレポートではなく、英語能力にして欲しい」という意見もあり、学習活動のねらいや意義が、必ずしも全員に認められてはいないということである。またリーディングの授業は一部習熟度別に編成されているので、その分けられたクラスについて「(自分のいるこのクラスより)低いレベルのテストの話の話を聞いているとクソ簡単で、それを自分たちと同じ評価基準で成績をつけられるのは腹が立った。なぜ、英語ができる学生の方が苦勞しなければならないのか。できない学生にはそれ相応の評価をすべきだと思う」と記述した学生もいた。これは正直な意見である。しかし、なぜこのような試験にするのか、そもそもなぜこのような学習活動を取り入れているのか、なぜひとつやり遂げてもまた次の難度の高い課題に取り組みねばならないのか、なぜ嫌なこと面倒なこと時間のかかることをやらされるのか、といった感想を抱いてしまう学生がひとりでもいたということが、大問題である。自分のためになっていると気づかずに、学習活動に仕方なく嫌々参加していたのだろうか。一生懸命取り組んで楽しかったとか力がついてよかったなどという達成感を抱くどころか、損をしたと思われてしまった。これは非常に残念なことなので、改善していくべき重要事項である。

しかし逆に、意外なあるいは想定以上の高評価を得られた学習活動もあった。どの活動も時間稼ぎや遊びだけの目的で導入しているわけではないのだが、振り返りの最後の「その他」の欄で、ここで取り上げた以外の活動について学生自ら言及したものがある。「洋楽の歌詞の穴埋めディクテーションも楽しかった」「聞いたことがある英語の歌の歌詞が（活動後に）こんな意味だったんだとわかっておもしろかった」「テキスト以外で先生が時々用意してくれた英文を読めてよかった」「大統領の話や難しい所信表明文でも、先生が言う通り、いかにも簡単な英語で書かれていることに驚いた。授業でいろいろな英文に触れられておもしろかった」などであるが、これらはいろいろな英語を読むという活動について言及されたものである。実際大多数の学生が楽しく参加しており、活動の意味を理解して価値を見出しているものと期待したい。

教師から学生への評価に対して、教師が自身の行う評価を評価する、つまり自身の評価に納得して高く価値づけできていることが重要である。

### 3. 3 学生からの授業評価

最後に、学生による授業評価を考察する。

英語科目をただの単位取得のためだけの授業に終わらせたくないという思いから、学生に伝えたいこと教え導きたいことを、ここではリーディング授業の学習活動に盛り込んできたが、学生にどの程度伝わただろうか。「大学に入ってから英文を読む機会が少なくなっていたが、様々な内容をいろいろな方法で読めたので、もっと頑張りたいという意欲が湧いた」「今後も更に上を目指し、自分を高めるために日々努力をしたいと思う」といったように、学生の振り返りでは、動機づけややる気の高まりについての言及が最も多かった。また、「Readingを頑張ることで、英語以外の他の勉強も頑張りたいという相乗効果が生まれた」「他の教科でも長い話や文を簡潔にわかりやすくまとめるのが得意になった」「物事を関係つけて考えられるようになって、中国語の授業でも生かすことができた」「他教科ももっと積極的に学ぼうと思えるようになった」など、英語の学習活動が他教科にも影響を及ぼした例も目立った。そして、「授業がきっかけになり、新聞や本を読む機会が増え、問題意識や考え気づく力も高まったと思う」「自分の興味のなかった分野にも触れることができ、その重要性にも気づいた」と視野を広げる助けになったという叙述や、「英語能力以外にも、人前で自分の意見を伝える力、人の意見に耳を傾けることの大切さ、苦手なことも諦めず意欲的に取り組む力が身についた。これらは社会に出てからもきっと役に立つと確信している」「いろいろなことに関心を持ち、それに対して自分が何を感じどう思うのかと考える力がついた」「ビジネスや時事に関する英文をたくさん扱ってくれたので知識も増えた。と同時に自分の意見を持ってそれを発する場があったので読んで終わりといった受身の学習でなく考える機

表1 授業評価アンケートの項目別得点推移

No.	項目の内容	2015年度 Reading I 7月調べ (89名)				2015年度 Reading II 1月調べ (89名)			
		担当クラス			科目区別平均* [外国語]	担当クラス			科目区別平均* [外国語]
		A	B	C		A	B	C	
2	この授業に関して授業以外に毎週平均してどのくらい勉強したか	2.73	3.32	2.72	2.40	2.52	2.88	2.45	2.38
4	この授業の教材・資料等は授業内容の理解を助けるのに役立ったか	4.10	4.18	3.76	4.33	4.33	4.54	4.21	4.33
8	この授業を履修して視野や関心は広がったか	3.82	4.00	3.86	4.16	4.41	4.50	4.24	4.20
9	この授業を履修してよかったと思うか	4.05	4.05	4.07	4.29	4.33	4.50	4.39	4.31

\* 大学全体の科目区別集計による  
該当科目は共通教育科目の [外国語] の区分である

会が持ててよかった」などと表現力や思考力についての言及も多かった。「自分が参加しなければいけない活動が多かったので、とても良い取り組みになった」「一年間授業を受けてきたが、勉強の苦勞の種類が全然違っていた」と、授業に参加して学習活動に一生懸命取り組んだからこそ力がついたという実感を述べた学生もいた。振り返りの叙述からは概ね好意的な評価が得られている。

次に、学生による授業評価アンケート<sup>6</sup> (再掲) の集計結果から評価を行う。表1は、項目2, 4, 8, 9について著者の担当するクラスと平均の得点の推移を示したものである。

項目2「この授業に関して授業以外に毎週平均してどのくらい勉強したか」の尺度は、A：3時間以上、B：2時間以上3時間未満、C：1時間以上2時間未満、D：1時間未満、E：学習時間なしであり、順に5, 4, 3, 2, 1と配点される。本学の授業評価アンケートでは、教員所属別、学年別、履修者数別、科目区別などのどの集計を見ても他の項目に比べて平均値はかなり低いものの、英語教科の特性か、科目区別の外国語の平均は最も高い。著者の担当するリーディングクラスはその平均を更に上回っているが、自宅での自律学習が浸透しており、前向きに取り組んでいる学生が比較的多いと推察できる。

項目4, 8, 9は、A：そう思う、B：ややそう思う、C：どちらとも言えない、D：あまりそう思わない、E：そう思わないという回答を示し、配点は順に5, 4, 3, 2, 1である。項目4「この授業の教材・資料等は授業内容の理解を助けるのに役立ったか」と項目8「この授業を履修して視野や関心は広がったか」については、どのクラスも Reading I よりも後半期の Reading II で得点を大きく伸ばしている。学生による振り返りの叙述からも同様の結果が得られており、様々な文献からいろいろな題材を準備して、それぞれに見合った学習活動を提供してきたことが、学生たちの視野を広げ興味関心を引き出す助けになったようである。しかしどちらも科目区別平均との上積みは少ないので、改善すべき課題である。項目9「この授業を履修してよかったと思うか」については前半期の後退を埋め合わせるだけであり、

むしろ学生からの叙述内容とはかけ離れた印象を受けたので、原因を突き止め謙虚に対応していく。

学生からはある程度の「評価」を得られたと認められるが、次の活動に、また次の授業次の学年にこれまでの取り組みの成果が引き継がれ、更に工夫を重ね、洗練された魅力ある授業を運営できるように、今後も教師として学び続けていきたい。

## 4 おわりに

### 4. 1 成果のまとめ

学生自身は、英文を読んで内容をまとめることができるようになったとか、英文を読むことが億劫でなくなったとか、自分の意見を人前で話したり書いたりする表現力がついたなどと述べており、英語力の向上は自覚している。それは、推察を伴う読解力、大意をつかむ速読力、重要なポイントを捉える要約力、それを日本語でまとめる言語運用力を一年かけて順番に養い培ってきたからこそその成果であったと言えよう。

そして、学生の省察記録には「外国の新聞は、当然トピックもアプローチの仕方も異なるので、かえって日本の立場を意識するようになった」「人の立場で物事を考えることの大切さがわかった」などといった叙述もある。リーディングの授業で取り組んだいくつかの学習活動には、英語力の養成以外にも、何か自分を成長させる意味があり、評価は認められたと考えられる。学生自身が自分をみつめる機会を持つことができ、たとえ小さくても自身の変容や伸長に役立ったと感じ取ってくれたらと願っている。

### 4. 2 研究の課題

提案したこれらの学習活動による成果としては、本研究ノートでは学生の省察記録から顕著な例を取り上げ、それをまとめたのみである。また、著者のねらいが学生全員に浸透したわけではなく、教師、教え導く側との感覚や価値観のズレや、一方的な思い込みもあったかもしれない。

今後もリーディング力養成と強化を図って授業方略の創意工夫を続け、またその他の英語科目についても、シラバスに沿った、より効果的な学習活動を開発していきたい。それらが学生の変容や伸長にどのような点でどのように結びついたかは、質問紙によるアンケート結果等を振り返りの記録と合わせて整理分析し、考察していく。更なる実践と改善を重ね、学習活動に対する学生からの評価と、教師から学生に行う評価に対する評価との関連性を検証し、その結果を報告するとともに、高等教育における英語授業方略の研究を継続し提案をする。

註

- 1 愛知大学名古屋校舎
- 2 学生の叙述の引用は、著者の担当するすべての科目、クラスにおいて学期末に行った振り返り活動からのものである。問いは科目によって異なり、すべて叙述形式とし、大学が一斉実施する尺度法の授業評価アンケート<sup>6</sup>と同時に実施した。

Reading II の授業の振り返りについて、次に項目のみを示す。

I. 授業内活動

- 1) 読解練習を積み重ね、特にどんな活動に興味がありましたか。それによってどのような効果がありましたか。
- 2) 表現力養成について、どんな活動によってどのような力がついたと思いますか。
- 3) 試験への取り組みはいかがでしたか。その成果はありましたか。丸暗記で臨んだ試験と比べてどのような違いがありましたか。

II. 授業外学習

- 4) Independent Reading レポートは何回提出しましたか。どのように取り組みましたか。どんな効果がありましたか。苦労した点、回を重ねるにつれて改善できたこと、レポート作成を通して身についた力などについて詳細に記述してください。

III. 自己省察

- 5) Reading の授業を通して、英語または他教科への学習姿勢や今後の目標、意欲の面で変化はありましたか。「関係つける力」「考え気づく力」「理解の具合をはかる力」はどのようにつけられましたか。その価値は認められましたか。
- 6) 考える学習を心がけ、判断力表現力が養成されるように学習活動をしてきました。就職活動に役立つことはありましたか。社会人として必要な力を身につけられたと思いますか。

著者の授業では毎学期末に叙述による省察活動を行うが、学生は非常に熱心に自身の振り返りに取り組んでいる。下図は、Reading II で実施した学生のリフレクションシートの写しである。



図 Reading II のリフレクションの写し

- 3 学生の叙述引用中の括弧内の注釈は、著者によって加筆されたものである。
- 4 Appendix 1 “List of Online Resources for Students: Where can you find articles online?” Kjeldgaard (2015). pp.56-57
- 5 愛知大学2014年度現代中国学部3年生54名

- 6 愛知大学の「学生による授業評価アンケート」を指し、学期末に授業内で行われるマーク読み取りの尺度法のアンケートである。名古屋学習・教育支援センターが管理と集計を行い、教師は結果を受けて分析と自己評価、改善すべき点などを記述するが、それはホームページ（ただし学内専用）で公表される。問いの項目は次の9つであり、裏面には該当の授業に対して「良かった点」「改善してほしい点」「授業以外に教室の設備などについての注文」を自由記述する欄がある。なお3)～9)の尺度は「A: そう思う B: ややそう思う C: どちらとも言えない D: あまりそう思わない E: そう思わない」であり、A～Eは順に5, 4, 3, 2, 1と配点される。

- 1) 何回欠席しましたか。 A: 無欠席 B: 1回 C: 2～3回 D: 4～5回 E: 6回以上
- 2) この授業に関して、授業時間以外に毎週平均してどのくらい勉強しましたか。  
A: 3時間以上 B: 2時間以上3時間未満 C: 1時間以上2時間未満  
D: 1時間未満 E: 学習時間なし
- 3) シラバスに基づいた内容でしたか。
- 4) この授業の教材・資料等は授業内容の理解を助けるのに役立ちましたか。
- 5) 教員は、学生が理解しているかどうかに関心しながら授業を進めていましたか。
- 6) 授業の内容を理解できましたか。
- 7) あなたは授業の到達目標を達成できたと思いますか。
- 8) この授業を履修して視野や関心が広がりましたか。
- 9) この授業を履修してよかったと思いますか。

- 7 ただし“TOEIC I”や選択科目の“TOEIC II”, “TOEIC III”のような試験のスコアアップを目的にした授業の試験は例外である。これらは TOEIC 試験を縮小した模擬試験を使用する。

## 参考文献

- キーン、ラリー／ワガナー、マイケル・D 著 高橋靖直訳 (2003). 大学教員「教育評価」ハンドブック. 玉川大学出版部
- Kjeldgaard, Marie (2015). Combining Skills-Based Instruction and Extensive Reading: Using Online Resources to Support a Reading Curriculum. 愛知大学語学教育研究室紀要 言語と文化. 第32号, pp.47-58
- 松下佳代編著(2011). 新しい能力は教育を変えるか—学力・リテラシー・コンピテンシー—. ミネルヴァ書房
- 齋藤孝著 (2007). 教育力. 岩波新書
- セルデン、ピーター／ミラー、J・エリザベス著 大学評価・学位授与機構監訳 栗田佳代子訳 (2009). アカデミック・ポートフォリオ. 玉川大学出版部
- 鈴木健 (2011). 第4章 クリティカルに読み解く. 鈴木健／竹前文夫／大井恭子編著. クリティカル・シンキングと教育—日本の教育を再構築する—. 世界思想社
- 山地弘起編著 (2007). 授業評価活用ハンドブック. 玉川大学出版部

資料

1 英文記事の要約とレスポンスの要項 “Independent Reading” の案内

**Independent Reading**



◎ねらい

1. 英語のウェブサイトのアクセスに慣れる
2. 様々なジャンルのトピックや形式に触れる
3. 英文から知識や情報を得る  
読書を楽しむ、英語表現やイデオロギの幅を広げる
4. 読んだ内容を正しく理解し、日本語または英語でまとめる
5. 読んだ記事について、自分の感想や意見を得る、それを日本語または英語で表現する

◎レポートの書き方の手順

1. ウェブサイトから記事を選択  
300 words 以上 400 words 以下で、長い英文は適宜抜き出す
2. 英文を印刷する  
コピーして貼り付ける  
記事の仕向・題名・著者・日付、または抜き出した巻・ページなどを併せに印刷する
3. 英文を読む  
読解の取組みがわかるようにその取組を手書きで記入する。  
e.g.) 重要箇所にてーカー(文構造のチェック)・単語の意味・語彙単語の追加 など
4. 要約する  
読んだ記事の内容を要約する  
日本語または英語で3～5行(文程度)
5. 感想や意見を記述する  
読んだ記事について、自分の感想や意見、問題点などを記述する  
日本語または英語で3～5行(文程度)

◎提出方法

- ・用紙はA4サイズで片定のみ使用する
- ・英文記事の上野右端に選出日と受講生の名前・所属・クラス番号・氏名を記載する  
e.g.) 2017/10/18 本橋 2年 No.11 Jacqueline Aiko
- ・英文記事に直接「読解の取組み」を、用紙の下段に「要約」と「感想・意見等」を手書きした
- ・複数ページになる場合は定上欄分を糊付けまたはホチキス留める
- ・一週間にひとりで 1 冊程度までにしてください

★おすめのサイト 別紙参照

★英語記述例

*Summary: More than a third of food produced in the world is wasted every year for various reasons. In some countries, consumers have high demands for perfect looking products. To reduce such food waste, the food bank is working on redistributing it to the hungry and spreading the good system. My favourite: Many people expect to buy cucumbers that are straight, of a certain length, and are perfectly green. As a result, many of cucumbers are destroyed. Since so much food is wasted for this reason, we should do what we can do now. I'm interested in food banks and I'd like to buy any cucumber even if it is not good shaped.*

